慶應義塾大学 SFC研究所

看護ベストプラクティス研究開発ラボラトリ

Report of 2012

看護ベストプラクティス研究開発・ラボ

Laboratory on Innovative Research and Practices for Nursing

開　設：2012 年 3 月 1 日
代表者：小松 浩子（看護医療学部教授）
関連 Web Site：http://www.kri.sfc.keio.ac.jp/japanese/laboratory/nursing.html
連絡先：慶應義塾大学看護医療学部小松研究室

本ラボラトリは、最善の看護実践 (ベストプラクティス) に不可欠である、（1）看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、（2）個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、（3）当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。

■メンバー

小松 浩子	看護医療学部教授	ラボラトリ・リーダーがん看護実践質保証研究開発
太田 喜久子	看護医療学部学部長	高齢者看護実践研究開発
野末 聖香	看護医療学部教授	精神看護実践研究開発
武田 祐子	看護医療学部教授	遺伝看護実践研究開発
宮脇 美保子	看護医療学部教授	倫理的看護実践研究開発・ベストプラクティス先導ナース研究
小池 智子	看護医療学部准教授	ベストプラクティス先導ナース開発研究
新藤 悦子	看護医療学部准教授	がん看護実践質保証研究開発
茶園 美香	看護医療学部准教授	患者、家族のセルフケア研究開発
森田 夏実	看護医療学部准教授	患者、家族のセルフケア研究開発・ベストプラクティス先導ナース研究
朴 順禮	看護医療学部専任講師	ベストプラクティス先導開発研究
矢ヶ崎 香	看護医療学部助教	がん看護実践質保証研究開発
山岸 直子	看護医療学部助教	患者、家族のセルフケア研究開発
荒武 喜子	看護医療学部助教	がん看護実践質保証研究開発

目的

医療現場では、日々新たな診断・治療が開発され、診療および看護はますます高度化・複雑化している。一方で、医療の効率化が叫ばれ、入院の短縮化、外来診療への移行が推奨され、患者や家族には通院による治療継続、セルフケアの促進が求められている。患者や家族は、移り変わる診療の場・環境のもとで、高度な医療内容を理解し、納得のいく判断のもとに診断・治療を受けることに多大な努力をしている。また、自身のワークライフと療養のバランスを上手にとることにも力を注いでいる。複雑で高度化した医療の中で、＜安心と安全＞が保証され、＜医療に対する納得と満足＞が得られ、＜当事者の価値が尊重＞され、＜充実した生活や生き方＞ができるよう、最善の看護実践（ベストプラクティス）を提供する必要がある。

本ラボラトリは、最善の看護実践 (ベストプラクティス) に不可欠である、（1）看護実践の質保証 (Quality) を推進する実践研究開発、（1）個別化・最適化した看護実践を現場に浸透・波及 (Utility) できる看護リーダーの養成、（3）当事者の価値を尊重する倫理的看護実践の醸成 (Explore) 、をめざすものである。この目的のために、＜看護実践の質保証研究開発＞＜ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発＞＜倫理的看護実践のためのシステム構築＞の３つの研究グループを組織化する。研究グループには、臨床現場においてベストプラクティスを推進している看護専門職者のほか、本ラボラトリの主旨に賛同いただける学外の研究組織、医療施設の方々を訪問研究員として迎え、共同研究をすすめる。忘れてならないのは、患者中心の視点をラボラトリの根幹につねに置くことである。そのために、定期的に、市民フォーラムを開催し、患者団体、地域住民等との交流を行い、研究成果の発信、評価、意見交換を行っていく。各プロジェクトの内容を記す。

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

臨床現場における最善の看護実践のアウトカムは、患者の安全と安心の保証、患者・家族の医療に対する納得と満足、患者の QOL の向上である。患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。ロジックモデル等の質評価理論に基づいてケアの質改善デザインを設計し、標準化したケアの検証を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるかは、＜医療イノベータ＞の役割を担う看護リーダーの活躍にかかっている。このプロジェクトでは、最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、患者（個人、家族、またはグループ）や他の専門職との治療的関係と協働関係を結び、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発、検証を行う。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

熟慮・納得のもとに、自身にとって最善の診療・ケアを選択する意思決定支援プログラムの開発と検証、および複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じ得る倫理的課題に対応する臨床倫理コンサルテーションシステム構築と実証をすすめる。併せて、組織的に倫理的看護実践が行えるケアリング風土の醸成を探求する。

研究活動計画の概要

プロジェクト A: 看護実践の質保証研究開発

患者アウトカムを促進するための最適なケアのエビデンスを集積し、標準化を行う。

プロジェクト B: ベストプラクティス先導ナースの開発

臨床現場でベストプラクティスを浸透・波及できるリーダーナース、臨床指導ナースの能力・役割を特定化し、キャリア開発プログラムを検討する。

プロジェクト C: 倫理的看護実践のためのシステム構築

事例検討により、複雑な病態・治療過程、脆弱な療養環境で生じる倫理的課題について検討する。

高齢社会における災害時と日常時をつなぐ看護実践の知の蓄積と効果的な支援方法の開発

太田 喜久子　慶應義塾大学看護医療学部　学部長

A.　目標

1．現代の高齢社会における災害支援に関わる看護実践の実際から
実践の内容と方法、課題についての情報を幅広く収集する。

2．災害時と日常時の看護実践を関連づけ、災害予防、災害発症時、再生に関わる効果的な支援方略を明らかにする。

B. 計画および実施過程

1．看護系各学会との連携、意見交換、交流から、各学会の活動実績を通し、災害支援に関わる情報を集約する。

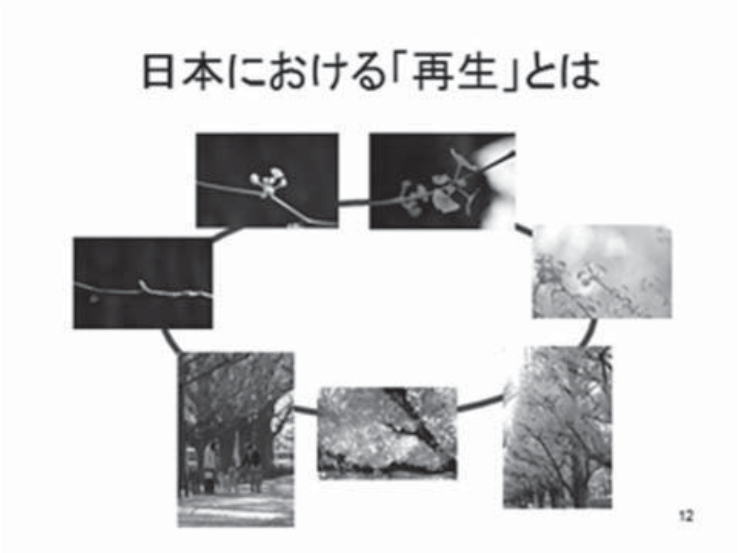
2．これまでの知見を踏まえ、看護学、老年看護学の立場から、災害看護実践の知の蓄積と、課題、今後の方向性について社会に発信する。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

① 日本学術会議東日本大震災復興支援委員会　災害に強いまちづくり分科会における学際的な審議、検討から提言「二度と津波犠牲者を出さないまちづくりー東北の自然を生かした復興を世界に発信」をまとめた。

② 第 32 回日本看護科学学会学術集会を「日本再生のとき、看護学の真価を問う」というテーマで開催し、「これからの日本社会と看護学の展望」と題し、会長講演を行った。



2．今後の課題、展望

災害に強いまちづくり分科会における学際的な検討を継続し、現地での聞き取り調査を行い、多面的に課題を分析する。

災害支援の実践事例をケースメソッド法などを用いて分析し、記録に残す方法を検討する。

超高齢社会に向かう中で、災害時と日常時の看護実践を関連づけた、災害予防、災害発症時、再生に関わる効果的な支援方略を検討していく。

3．2012 年度の業績

[提言]

・日本学術会議　東日本大震災復興支援委員会　災害に強いまちづくり分科会，
提言「二度と津波犠牲者を出さないまちづくり－東北の自然を生かした復興を世界に発信－」，
2012 年 4 月．http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-t-shien2.pdf

[著書]

・太田喜久子編著，老年看護学－高齢者の健康生活を支える看護，医歯薬出版株式会社，2012.
・中島紀恵子責任編集，太田喜久子，奥野茂代，水谷信子編著，新版・認知症の人々の看護，医歯薬出版株式会社，2013.

[学会発表]

・太田喜久子 ,「これからの日本社会と看護学の展望」，第 32 回日本看護科学学会学術集会会長講演，2012 年 11 月.

・Sugawara,M.,Ohta,K., Factors related to the onset of delirium on the first day of hospitalization and factors influencing the state of delirium within three days after admission in elderly cerebral infarction patients receiving medical management,　The 9th International Conference with the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery, 2012.

1）広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者への支援に関する研究
2）経口化学療法を続ける患者の服薬の実態解明と安全、確実な服薬支援モデル開発
3）遺伝性乳がんの予防・早期発見 , 管理をめざす統合的ケアプラットフォーム

小松　浩子　慶應義塾大学看護医療学部　教授
矢ヶ崎　香　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

がん患者へ最善のケアを提供することを目指して、がん医療の変化、発展に沿った新たな看護実践の開発のための活動を行っている。

1）経口抗がん剤受ける患者に対する安全、確実な服薬支援モデルの開発を目標とした。

2）病院・大学共同研究グループの活動として、広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者への支援に関する研究を進め、看護実践の開発、改善を目指している。

3）遺伝性乳がんの予防・早期発見、管理のための統合的ケアプラットフォームの創成を目指した。

B. 計画および実施過程

1）経口化学療法の質的研究

①今年度は経口化学療法を受ける患者への服薬支援の現状や改善策を明らかにするために看護師を対象にインタビュー調査を実施し、論文による報告を計画した。

2）広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者への支援に関する研究

①メンバー：（看護医療学部）小松、新藤、茶園、矢ヶ崎、山岸、荒武、（6 － 5 病棟）片岡、野池、高橋、野池、鄭、福原、荊尾、野村、庄田、（外来）矢崎、勝又、高橋、江原、（婦人科）藤井、田中、岩田、杉山、森定（敬称略）

②今年度は、データ収集、分析を終え、結果を学会で報告および論文を国際誌への投稿を計画した。さらに、これらの結果を患者への看護実践へ還元するためにケアツールを作成することを計画した。

3）遺伝性乳がんのケアに関する研究

2009 年度から開始した本研究は、HBOC の診療やケアに携わる医療者を対象にしたデータから、「遺伝性乳がんの予防・早期発見、管理」の現状に関するに関する概念化を行い、論文による報告を計画した。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）経口化学療法の質的研究

2012 年度は、経口抗がん剤治療を受ける患者に対する看護実践の現状や看護実践の改善に向けた看護師の認識を明らかにすることを目的に、18 名の oncology nurses を対象にフォーカスグループインタビューを行い、質的分析を行った。結果は Figure 1 に示す通り、経口化学療法を受ける患者にする「看

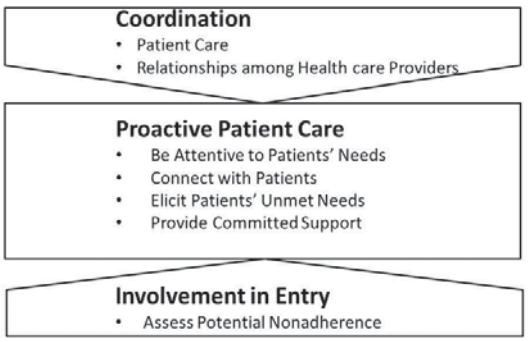


Figure 1. The Need for a Nursing Presence

護のプレゼンスの必要性」が明らかになった。本研究の結果は論文として報告した。

2）広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者への支援に関する研究 (右写真)

妊孕性温存手術を受けた子宮頸部がん女性の経験として、「脅かされた女性性のアイデンティティの修復」が導かれた。この結果については演題発表および論文で報告した。

現在は研究結果を臨床に還元するためのケアツールを作成中である。また、患者中心のケアシステムの現状の課題が明らかになり、改善策を検討する契機へと発展している。

3）遺伝性乳がんのケアに関する研究

遺伝性乳がんリスク管理は、日常診療において第二義的な位置づけで行われていることが概念化できた。統合的ケアプラットフォームの要件として、ハイリスク患者をフォローアップする特殊外来の創設と個別化医療の要請に対応する看護実践の必要性が見いだされ、論文として報告した。

2．今後の課題、展望

1）2013 年度には、経口化学療法を受ける

患者の服薬の現状や課題について調査を計画している。今年度の看護師を対象とした調査の結果と、次年度の患者を対象とした調査から、経口抗がん剤治療を受ける患者に対する実用可能で安全、確実な服薬支援モデルの開発を目指したい。

2）トラケレクトミ―を受ける患者のニーズに応じた最善のケアを提供するためにも、ケアツール、ケアシステムの開発を進めていきたい。

3）ハイリスク患者をフォローアップする特殊外来の創設などの検討を進めたい。

3．2012 年度の業績

1) Kaori Yagasaki, Hiroko Komatsu. The Need for a Nursing Presence in Oral Chemotherapy, Clinical Journal of Oncology Nursing. 2013 (in press).

2) Hiroko Komatsu, Kaori Yagasaki, Rie Shoda, Younghui Chung, Takashi Iwata, Juri Sugiyama,Takuma Fujii. Repair of the threatened feminine identity: experiences of women with cervical cancer undergoing fertility preservation surgery. Cancer Nursing. 2012 (in press)

3) Hiroko Komatsu, Kaori Yagasaki, Are We Ready for Personalised Cancer Risk Management? -The View from Breast Care Providers- . International Journal of Nursing Practice. 2012 (in press).

4) Hiroko Komatsu, Naoko Hayashi, Kumi Suzuki, Kaori Yagasaki, Yukiko Iioka,Joyce Neumann, Seigo Nakamura, Naoto Ueno. Guided Self-Help for Prevention of Depression and Anxiety in Women with Breast Cancer. ISRN Nursing. 2012, doi:10.5402/2012/716367.

5) Hiroko Komatsu, Kaori Yagasaki, Wakako Osaka, Hideko Yamauchi, Seigo Nakamura.A Blended Learning Model of Peer Support Training Program for Women with Breast Cancer. International Journal of Advanced Nursing Studies, 1 (2) ,2012, 58-72.

遺伝性腫瘍患者・家族に対する看護支援の開発に関する研究

武田 祐子　慶應義塾大学看護医療学部　教授

A. 目標

遺伝性腫瘍患者・家族に対して、適切な医療の活用によるがん死の回避と、ＱＯＬ向上に寄与する看護支援を開発し、提供のための基盤を構築する。

B. 計画および実施過程

１）適切な遺伝医療を提供するためのケアネットワークモデルの構築

遺伝性腫瘍による若年死亡を回避するために、早期発見・早期治療を行い、診療科の枠を超えた情報共有や継続医療の提供のあり方を検討

① 遺伝性腫瘍の家系であることが推測される患者の遺伝診療に対するニーズの把握

② 医師や看護師が遺伝診療に携わる機会に関する実態把握

２）遺伝サポートグループと看護者との協働方略の構築

遺伝子疾患家系の罹患者・保因者、遺伝子疾患家系の家族員の未罹患者、における状況、課題、ニーズを分析

① サポートグループが必要としているケア方法を共同作成することを通して遺伝医療サービスやシステムの改善を図る

② ゲノム情報を通した人生設計・予防をめぐる諸問題を問う

C. 目標達成状況

１．研究実践活動

１） 適切な遺伝医療を提供するためのケアネットワークモデルの構築

遺伝性腫瘍の家系であることが推測される患者の遺伝診療に対するニーズの把握の一環として実施した、家族性大腸腺腫症患者のインタビュー内容（体験談）について、多施設での活用を可能とするため、小冊子にまとめた（図 1）。

２）遺伝サポートグループと看護者との協働方略の構築

遺伝サポートグループと看護者協働プログラムの試行として 2013 年２月～３月に実施したセミナー、学習会（図 2）での内容を踏まえて、2013 年 9 月 28 日、日本遺伝看護学会第 11 回学術大会において、交流会・パネルディスカッション「遺伝サポートグループから看護への提案」を開催した。パネリストは表皮水疱症友の会（DebRA Japan）、日本ハンチントン病ネットワーク（JHDN）、財団法人日本ダウン症協会（JDS）、日本マルファン症候群協会、PKU 親の会連絡協議会の代表者であり、様々な疾患特異の状況を踏まえての内容と共に、患者・家族の体験した出来事や経験からの提言や、生涯にわたる医療費負担の問題等、遺伝性腫瘍と共通の課題等についてもディスカッションが行われた（図 3.4）。

図 1．家族性大腸腺腫症ハンドブック

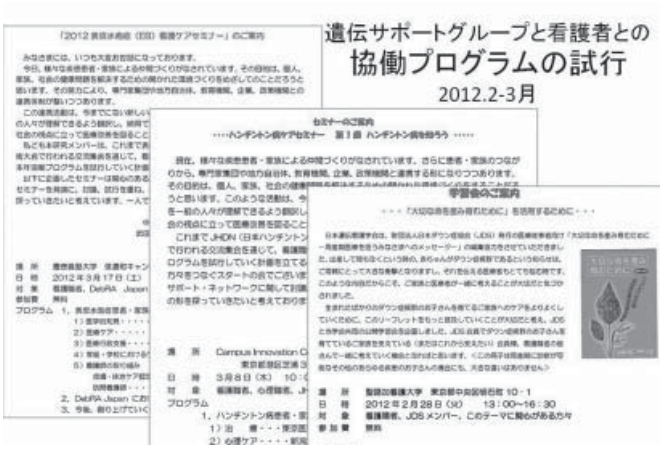


図 2. 遺伝サポートグループとの協働プログラム

図 3・4　日本遺伝看護学会第 11 回学術大会「遺伝サポートグループから看護への提案」

2．今後の課題、展望

遺伝性腫瘍診療に携わる医師や看護師の役割に関する実態把握を次年度に計画している。診療科や各部門で連携を担う人材育成も課題となっている。

また、遺伝子疾患および遺伝性腫瘍患者の遺伝診療に対するニーズの把握から、医療費負担に関する課題も挙げられており、サポートグループと協働で対策を検討したい。

3．2012 年度の業績

学会発表：

武田祐子ほか：家族性大腸腺腫症の医療費対策に関する活動 , 家族性腫瘍 12(2), A 44,2012

雑誌：

武田祐子：家族性腫瘍患者・家族の特性から看護に求められること , 特集：家族性腫瘍患者と家族へのかかわり―がん遺伝看護の観点から―, 臨床看護 39(2),134-141,2013

うつ傾向改善のためのケア・プロトコールを用いた精神看護専門看護師の介入評価

（平成 22 ～ 24 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B)「患者・家族を対象とした精神看護介入のニーズ分析とプロトコール開発」の研究の一部を、看護ベストプラクティスラボに登録したものである。）

野末　聖香　慶應義塾大学看護医療学部　教授
福田　紀子　慶應義塾大学看護医療学部　講師
石井美智子　慶應義塾大学看護医療学部　助教
宇佐美しおり　熊本大学大学院生命科学研究部　教授
安藤　幸子　神戸市看護大学　教授
上野　恭子　順天堂大学医療看護学部　准教授

A. 目標

がん患者の QOL 向上のためには、うつ傾向を早期に発見し、早期に適切な治療やケアを提供することが重要であり、精神看護専門看護師にはケア提供者としての役割が期待されている。そこで、本研究では、患者のうつ傾向を早期にとらえ、改善するためのケア・プロトコールを作成し、プロトコールに基づいたケアを実施し、その結果を分析することにより、効果的なケア方法を開発することを目的とした。

B. 計画および実施過程

1. 研究の概要

1）デザイン：ランダム化比較試験

2）対象者:化学療法を目的として入院している肺がん、血液がんの患者。調査対象施設は 3 施設である。

3）介入：ケア・プロトコールを用いた精神看護専門看護師による介入

介入群に実施するケア・プロトコールは、支持的精神療法、心理教育の理論をベースに、研究者らによる先行研究、身体疾患でうつを合併した患者へのケアガイドラインを参考にして介入内容、方法、介入時期や期間を検討し、本研究用に研究者らが作成した。対照群への介入としては心理教育パンフレットを作成し、手渡した。介入期間は原則 2 週間とした。

4）アウトカム評価の指標：「うつ状態」、「QOL」、「患者満足度」

調査用紙は①基礎情報、② PHQ-9、③ HADS、④ SF-8™（アキュート版）、⑤ CSQ-8J、であり、介入開始時と、介入終了後の 2 時点で測定した。

5）倫理審査：慶應義塾大学看護医療学部研究倫理委員会、および調査施設の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

2. 実施状況

1）今年度は、30 名の介入とデータ収集を終えた。

2）途中段階であるが、30 名のデータ分析を行っている途中である。

3）介入研究実施上の課題（組み入れ数を増やす方法、等）についての検討と改善を行った。

C. 目標達成状況と今後の課題

1）目標対象者数を 94 名と算出し、介入とデータ収集を開始し引き続き現在もデータ収集中である。来年度も介入とデータ収集を行う。

2）効果研究と並行して、ケア・プロトコールの内容に関する検討を行う。

3）ケア・プロトコールを用いたケアを展開できる実践システムに関する検討を行う。

外来でエンドレスな治療を受ける再発大腸がん患者の「生を繋いでいく力」支援仕組み構築

新藤　悦子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A. 目標

当事者たちの生を繋いで行く体験と支援のニーズを明らかにし、当事者と医療者でつくる支援のありかたを考える。

B. 計画および実施過程

1　再発がん患者の支援の現状と課題の把握。文献および既存の大腸がん患者サポート組織に対する聞き取りを行い、支援の方法・内容・成果と課題などを整理した。

2　研究組織：連携研究者：茶園美香、山岸直子、小松浩子（看護医療学部）

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）再発大腸がん患者の支援ニーズ、支援の方法論、効果、課題に対する文献検討

2）既存の支援組織へのヒアリング

現在の大腸がん患者サポートの内容、効果と課題を明らかにした。

(1) 患者会の機能について：①患者会への登録者のピアサポート②大腸がんに罹患した患者・家族からの相談③行政などへの働きかけ

(2) 活動内容について：①就労支援：治療継続には経済的基盤は重要な問題である。一方で離職することも多い。②心理的支援：体験者は「理解してもらえない」という感覚に陥りやすく、どうしても孤立しがちであり、心理的サポートは欠かせない。③相談機能：家族の不安に対するサポートの必要性。治療選択や化学療法に関する情報を求めている。④医療システムや人々への発信：治療形態―夜間治療システムへの提案と早期発見の重要性への発信。

(3) 医療者への課題と期待：①医療機関における相談やサポートの現状に対し多くを期待していない。②がん患者相談室の利用の仕方に課題。特に男性は気持ちをオープンにしない傾向にある。声を上げられない人へのサポートが課題である。③がん体験者に対して、どう乗り越えてきたのか、話を聞きたいというニーズがある。④医療機関において継続的に治療を受けている人だけでなく、半年単位、年単位でフォローさを受けている人々のサポートも重要である。

2．今後の課題、展望

当事者へのインタビューをとおしてニーズ調査をする予定であるが、リクルートの方法に課題がある。臨床の方の協力得て当事者サポートのための活動の可能性についても検討する。

大学病院に勤務する看護師の生きる意味を苦悩するがん患者とのコミュニケーションスキル向上に関する研究

茶園　美香　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
新藤　悦子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
近藤　咲子　慶應義塾大学病院看護部　看護師長

A. 目標

急性期の医療を担う大学病院の看護師の生きる意味を苦悩する患者とのコミュニケーションスキル向上に寄与する。本年度は、過去に実施した実態調査・教育プログラム介入研究における質的データを分析し、今後の教育プログラムの資料とすることである。

B. 計画および実施過程

実態調査・教育プログラム介入研究における質的データを分析する。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）実態調査質的データ分析結果

看護師 222 名の回答中、85 名の記述データを内容分析。「話す時間がとれない」「対応が難しく対応へのフィードバックがない」「対応に関わる否定的な感情の表出」など 5 つに分類され、コミュニケーション上の課題を抱えつつ実践をしていることがわかった。

2）コミュニケーションスキル向上教育プログラム介入研究における記述データの分析

本介入は、現象学を理論的背景とする村田らが開発したプログラムに基づく。院内公募によって経験 3 年以上～ 30 数年の師長、主任、スタッフナース 24 名の参加を得た。「対応の困難感無力感などの否定的感情の渦巻き」「コミュニケーションへの自負がある一方、結果への不安」「誘導的会話や憶測による自分本位の対応への反省」など 5 つが記述された。介入後は、患者の苦しみに焦点化する方法を知り、自分の対応の傾向を振り返った。今後もフィードバックを受けながらスキルを定着化していく必要を感じ、さらにはこのスキルが広がっていく必要性が記述された。

2．今後の課題、展望

コミュニケーションスキルの獲得・定着・ブラッシュアップなどのフォローアップを目的としたピアグループによる学習会プログラムの構築を目指したい。

3．2012 年度の業績

・新藤悦子，茶園美香，近藤咲子（2012）.「生きる意味がない」と訴える終末期がん患者とコミュニケーションをとる大学病院看護師の態度．死の臨床，35（1），95-100
・新藤悦子, 茶園美香, 近藤咲子, 本多昌子（2012）．大学病院に勤務する看護師への終末期患者とのコミュニケーションスキル向上プログラムの有効性の検討．第 17 回日本緩和医療学会学術集会（神戸），328.

子育て中のがん患者が子どもに病気を伝えるための看護支援プログラムの構築

茶園　美香　慶應義塾大学看護医療学部　准教授
新藤　悦子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A. 目標

子育て中のがん患者が、子ども (18 歳以下) に病気を説明する（病名、病気の状態、症状、治療方法や副作用、余命）ことへの大学病院看護師の認識と支援の実態を明らかにする。

B. 計画および実施過程

・大学病院に勤務し、がん患者に接する機会のある専任職員の看護師および師長、主任、副主任を対象にアンケート調査を行い、分析した。
・アンケート調査用紙は、先行研究の結果を参考に研究者らで作成した。

C. 目標達成状況

1. 研究実践活動

1) 調査結果

（1）背景：対象者 427 名に配布し、229 名（回収率 53.6％）から回収した。対象者の看護師の経験年数は 10 年未満が多かった。子どものころ（18 歳以下）に、親しい人（親、兄弟姉妹、祖父母など）をがんでなくした経験のある看護師は 38.4％であった、
（2）多くの看護師が支援に関心を持ち、支援を「考えている」看護師も半数以上いた。
（3）子どもに接する機会：多くの看護師が子どもと接する機会があった。
（4）がん患者からの相談：ほとんどの看護師が相談を受けていなかった。相談を受けていないが子どもへの説明が気になる看護師が約 82％と多かった。

今回の調査で、看護師は、支援の必要性を理解し、支援の意思は持っていたが、積極的には支援を考えてはいなかった。その理由は、支援するために必要な知識や方法の理解不足が考えられた。

2. 今後の課題、展望

今後は看護師が、子どもに伝えることの意味や方法、がん患者の心理状態と子どもの心理状態（子どもが求めていること）などの知識を獲得して実践できる方法を検討する。

3.2012 年度の業績

・片倉佐央里、茶園美香、大沢かおり、熊野真紀、小澤美和：子育て中のがん患者が子どもに病気の説明をしていない理由について―実態調査の質的分析―、第 17 回日本緩和医療学会学術大会、2012
・茶園美香、新藤悦子：子育て中のがん患者支援能力向上のための看護師教育―子育て中のがん患者が子どもに病気を説明することを支援する看護師の認識と支援の実態―、平成 24 年度慶應義塾大学 SFC 研究所プロジェクト補助研究報告書、2013.

化学療法を受けているがん患者に対する運動プログラムの構築に関する研究

茶園　美香　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A. 目標

化学療法中のがん患者の QOL を維持・向上するために体操を実施しその結果からその実行可能性を検討する。

B. 計画および実施過程

1. 研究組織：研究分担者：新藤悦子、山岸直子、小林正弘、森田夏実
2. 図 1 の概念枠組みとした前後比較介入研究とし、前年度に引き続いて調査を継続した。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1) 調査結果

(1) 対象者 70 名で、4 か月間実施したのは 38 名、平均年齢は 51 歳（SD ＝ 10.6）であった。

(2) 4 ヵ月間の体操実施状況：: 実施した日数 / 実施すべき日数 :49.3% であった。指定の体操を実施した実施日数は 61.8% であった。副作用がある日でも 86% が実施していた。体操実施の理由には、: 身体的・気分的体調の回復、身体の心地よさ、効果の実感などがあった。

(3) 介入前後の比較 :SF-36v2: 下位尺度（8 項目）の全てが上昇し、身体機能、体の痛み、心の健康の 3 項目に有意差を認めた。HADS：不安得点と抑うつ得点はわずかに下がり、大腿周囲測定値は増加した。以上から体操を実施する効果があったと考えられた。

2．今後の課題、展望

今後は、1 か月、2 か月、3 か月ごとの脱落者の特徴を明らかにするための分析を継続し、病棟で活用するための方法を検討する。

3．2012 年度の業績

・M. Chaen ,E. Shindo ,N. Yamagishi, M. Kubo, M. Kobayashi, T. Sugaya, S. Fukui：Feasibility Study of an Exercise Program for Cancer Patients Undergoing Chemotherapy,the17th International Conference on Cancer Nursing(ICCN),2012.

長期に血液透析療法を継続するために患者が実施している生活上の工夫

森田　夏実　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A. 目標

我が国の透析患者は約 30 万人を超えている (2010 年末現在、透析医学会、2012) が、医学的知識の進歩や治療経験の積み重ねにより長期に生存する患者も増加している。生存 5 年以上が 52%、10 年以上の患者は 26%、20 年以上は 7%、25 年以上は 3.8%、最長透析歴は 42 年 8 ヶ月である。ヨーロッパでの 5 年生存率は 48%、アメリカ合衆国では 40%、10 年生存率は 6% (Robinson, 2009) で、世界と比しても長期透析患者が多い。透析医療・看護の専門的知識向上によるものだけでなく、患者自らが日々の生活の中で実施している具体的な工夫や個人的な知恵という要因が長期の生存を可能にしていると考えられる。しかし患者の個人的で具体的な工夫や知恵は、施設内の管理や指導等に活用されているが、日本人としての体系的な知識としては蓄積されていない。

本研究の目的は、長期透析患者が透析を受けながら生活する過程で培ってきた工夫・知恵・秘訣を明らかにし、透析導入する患者が長期に安定的な療養生活をサポートするための患者・看護・医療の視点を明らかにする。

B. 計画および実施過程

2011 年度の活動：関東圏内の病院で 40 年余にわたって血液透析療法を受けながら生活している A 氏 70 代女性およびその夫に、透析治療中に 3 回、A 氏をケアする主治医 1 名と受持看護師 1 名に 1 回ずつ半構成的面接を行った。それぞれ 1 回の面接時間は 60 ～ 90 分であった。対象には文書と口頭で研究内容を説明し書面にて同意を得た。面接は IC レコーダーに録音し逐語録に起こし、長期間生きてこられた工夫に関する語り部分を抽出し、長期間透析を受けながら生きてこられた工夫を明らかにした。

2012 年度の活動：過去の研究で関係のとれている関東、関西、中国地方で透析クリニックに研究対象者の選定を依頼し、研究者から研究の説明を受けることを了承した対象候補者に対して、研究者が直接出向いて研究の説明を行った。同意された候補者を対象者として、半構成的面接を実施した。対象者の希望する場所（患者の場合は透析中のベッドサイド等、医療者は会議室）と時間を調整した。

患者には長期透析生活を送ることができていると思われる療養生活上の工夫・知恵・秘訣について、主治医および看護師には、対象となる患者を長期間にわたって治療･看護している経験から、患者が行ってきたと考えられる工夫および医療者としての工夫について語ってもらった。対象者の了解を得て録音、逐語録に起こし、その中から長期に血液透析療法を受けて生活する際の患者および医療者の工夫・知恵や秘訣を抽出した。現在および将来に透析導入していく患者が長期に安定的な透析生活をサポートするための視点を明らかにした。

本研究は、平成 23,24 年度慶應義塾大学学事振興資金による研究補助を受け、慶應義塾大学看護医療学部研究倫理委員会の承認を得て実施した（受理番号 179)。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

平成 23 年度に行った A 氏が長期に透析生活を続けてこられた秘訣は、1) 栄養士や看護師等の専門家から指導を受けながら食事療法をきちんとした、2) 慣れていった、3) 仕事を継続していた 、4) 夫の協力と介護 、5) 医師・看護師・家族等が患者の「生きたい」という気持ちを親身に支えてくれた、が抽出された。第 6 回日本慢性期看護学会で発表した。

平成 24 年度には、関東、関西、中国地方の外来通院による透析クリニックにおいて、研究参加に同意した血液透析歴が 20 ～ 30 年未満の患者 4 名、30 年以上の患者 9 名と各患者の主治医 3 名、担当看護師 5 名に 1 時間程度の半構成的面接を行った。その中で、40 年超の患者 B 氏について分析を行った。透析患者として生きるテーマは、【海苔を越えず】【主治医の作品 / ペイシェントモデルとして生きる】であった。「死にたくない」が根底にあり、「身体をいたわりながらの生活を習慣づける」を一貫して重視してきた。そのためには「体調の変化をちゃんと感じる」、日常生活で「一点豪華主義」を大切にし、他者から「当てにされているという実感」に支えられていた。40 年を振り返ると「ライフステージ毎の目標で頑張る」を目指し、生きる事の中軸に「あなた任せじゃだめ」を置きながら、自分なりの 70 年の人生を歩んでいることが示された。

長期透析患者の生存を可能にした主治医と担当看護師が持っている治療・看護に対する理念・方針は、1．至適透析の実施、2．適切な食事摂取と適度な運動の実施、3．患者が透析と共に生きる患者自身の方法の尊重、4．医療従事者と患者との開かれた関係、が明らかになった。また、長期生存する患者の特性として、1．生きたいという強い意志を持っている、2．厳格過ぎない食事と水分管理を行っている、と認識していた。

2．今後の課題、展望

2 年間のデータ収集・分析に加えて、全ての面接の分析を行っていき、研究の目標に向けて結果を導き、発表していくことが課題である。2013 年度は、今年度の分析成果の一部として、6 月に第 7 回日本慢性看護学会学術集会（透析とともに 40 年間を生ききる慢性腎不全患者の経験・秘訣）、7 月には、Sigma Theta Tao International's 24 Nursing Research Congress において "What philosophy of health professionals enabled Japanese hemodialysis patients to survive longer?" を発表予定である。

3．2012 年度の業績

森田夏実、血液透析療法と共に 40 余年生きる腎不全患者の経験―長期間継続の秘訣―
第 6 回日本慢性看護学会学術集会、浜松、2012.6.

非ホジキンリンパ腫成人サバイバーにおける身体活動と生活の質の関連

荒武 喜子　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

非ホジキンリンパ腫成人サバイバー（以下 NHL サバイバー）の身体活動および生活の質に関するデータを解析することで現状を明らかし、発表活動を通して彼らの身体活動および生活の質の促進に寄与する。

B. 計画および実施過程

2013 年 2 月 16 日　第 27 回日本がん看護学会学術集会にて発表
2013 年 3 月 8 日　第 35 回日本造血細胞移植学会総会にて発表
2013 年 3 月末　専門誌への投稿

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1) NHL サバイバーにおける身体活動と生活の質の関連（日本がん看護学会学術集会にて発表）

NHL サバイバーでは治療後数年を経ても健康に関連する生活の質（以下 HRQOL）の低下が報告されている。本研究は、がんサバイバーの HRQOL の向上に有効とされている身体活動に焦点を当て、日本の NHL サバイバーの身体活動状況、及び身体活動量と HRQOL の関連について明らかにした。対象者は、診断後 6 ヶ月 -8 年の NHL サバイバー 101 人だった。結果、米国スポーツ医学会の身体活動ガイドライン（週 150 分以上の中等度／高強度の身体活動を実施：以下ガイドライン）を充足していない者は 4 割だった（図 1）。

項目	人数（%）
身体活動のガイドラインを充足している	
週150分以上中等度/高強度の身体活動を実施	64(63.4)
身体活動のガイドラインを充足していない	37(36.7)
週1-149分中等度/高強度の身体活動を実施	12(11.9)
週1分未満中等度/高強度の身体活動を実施	25(24.8)

図 1 身体活動のガイドラインを充足しているか否か（N=101）

身体活動量と HRQOL の関連については、ガイドライン充足者の身体面の HRQOL は充足してない者より高く、ガイドラインに沿って身体活動を促進することの重要性が示唆された。また、身体活動量（頻度・時間・強度を掛け合わせた総合点）が多い者ほど身体面の HRQOL は高かった。つまり、個々の状況に応じた頻度・時間・強度での身体活動への取組みは、身体活動量が低下している NHL サバイバーの HRQOL の向上に良い影響をもたらす可能性が示唆された。

一方、ガイドライン充足の有無や身体活動量と精神面の HRQOL の間には関連が見られなかった。この点については、精神面の HRQOL が高い集団であったことも影響していると考えられた。

2)　自家末梢血幹細胞移植後の NHL サバイバーの身体活動状況の検討

（日本造血細胞移植学会総会にて発表）

1) の対象者の中で、自家末梢血幹細胞移植（以下 SCT）を行った 14 名に焦点を当て、SCT 後 NHL サバイバーの身体活動および HRQOL を明らかにした。その結果、SCT 後 NHL サバイバーの身体活動量は SCT 未経験者とほぼ同等だった。一方で、身体活動時間で層別化した 3 群比較においては有意差が認められ、その内訳として、SCT 経験者でガイドラインを充足していない者 6 人のうち 5 人が比較的長時間（週 1-149 分）の中等度 / 高強度の身体活動を実施していた（図 2）。この結果には、SCT 経験者は理学療法士や医師などから運動指導を受けた経験のある者が有意に多かったことから、専門家による運動指導への関わりが影響している可能性が推察された。

また、SCT 後の NHL サバイバーの HRQOL は SCT 未経験者とほぼ同等だったが、SCT 経験者は未経験者よりも抑うつ状態であったことから、SCT 経験者において抑うつへのケアが HRQOL を促進していくために必要と考える。

項目	SCT経験者（N=14）	SCT未経験者（N=87）	P値 [a]
身体活動のガイドラインを充足している			0.007
週150分以上中等度/高強度の身体活動を実施	8(57.1)	56(64.4)	
身体活動のガイドラインを充足していない			
週1−149分中等度/高強度の身体活動を実施	5(35.7)	7(8.0%)	
週1分未満中等度/高強度の身体活動を実施	1(7.1)	24(27.6)	

[a] P値は全てχ2検定を使って計算された（両側検定結果）。2×2はFisherの直説法を使用した。
P≦0.05を統計学的に有意であると判断した。

図 2 身体活動のガイドラインを充足しているか否か（3 群比較）(N=101)

2．今後の課題、展望

専門雑誌への投稿は、2013 年 5 月を予定している。今後は、どのような頻度・時間・強度による身体活動への取組みが HRQOL の促進のために有効であるかを検討すると同時に、身体活動に留まらず NHL サバイバーに対するケアについて検討していきたい。

3．2012 年度の業績

第 27 回日本がん看護学会学術集会（口頭発表）

第 35 回日本造血細胞移植学会総会（示説発表）

食事療法の自己管理が困難な 2 型糖尿病患者に対する熟練看護師の姿勢とアセスメント

山岸　直子　慶應義塾大学看護医療学部　助教

A. 目標

食事療法の自己管理が困難な 2 型糖尿病患者に対し、熟練看護師がどのような姿勢で患者と向き合い関係性を築いているか、また、患者の置かれている全体的な状況を理解し自己管理につながる解決の糸口を見つけているかという熟練看護師の思考プロセスを明らかにし、熟練看護師の姿勢とアセスメントの構造化を行う。

B. 計画および実施過程

1）外来で看護個別相談・指導にあたっている糖尿病看護経験 5 年以上の実践能力の高い熟練看護師 8 名を対象に、食事療法の自己管理が困難な 2 型糖尿病患者に対する姿勢とアセスメントについて面接法によりデータ収集し、質的に分析を行う。

2）同目的、方法で取り組んだ修士論文における熟練看護師 5 名を対象とした結果と統合して分析し、熟練看護師の姿勢とアセスメントの構造化を行う。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

1）熟練看護師 8 名を対象とした分析結果

2010 年 12 月～ 2013 年 1 月に熟練看護師 8 名からデータ収集を行った。そのうち 5 名の分析結果について、第 17 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会で発表した。結果は図 1 参照。

2）修士論文の結果との統合

今回データ収集を行った熟練看護師 8 名と、修士論文においてデータ収集を行った熟練看護師 5 名の計 13 名のデータを統合して分析し、次の結果を得た。

・熟練看護師は、患者との信頼関係を意図的に築きアセスメントの質を高め、さらに、患者との関係性を評価しながら関係性を深める努力をしていた。

・患者にとっての生活や食の意味を含めて患者背景を把握し、食事療法の自己管理への影響を推測・確認することを中心に位置づけながら、様々な視点から潜んでいる問題を探り、患者に合った関わり方を試行錯誤しながら見出していた。

・年齢や病気の成り行き、生きる目標や生活の質を考慮して自己管理の目標を判断し、患者と目標を共有しながら支援につなげていた。

・様々な側面の統合的判断と、言語的・非言語的サインからの直観的判断をとおして、タイミングを見計らい看護援助につなげていた。

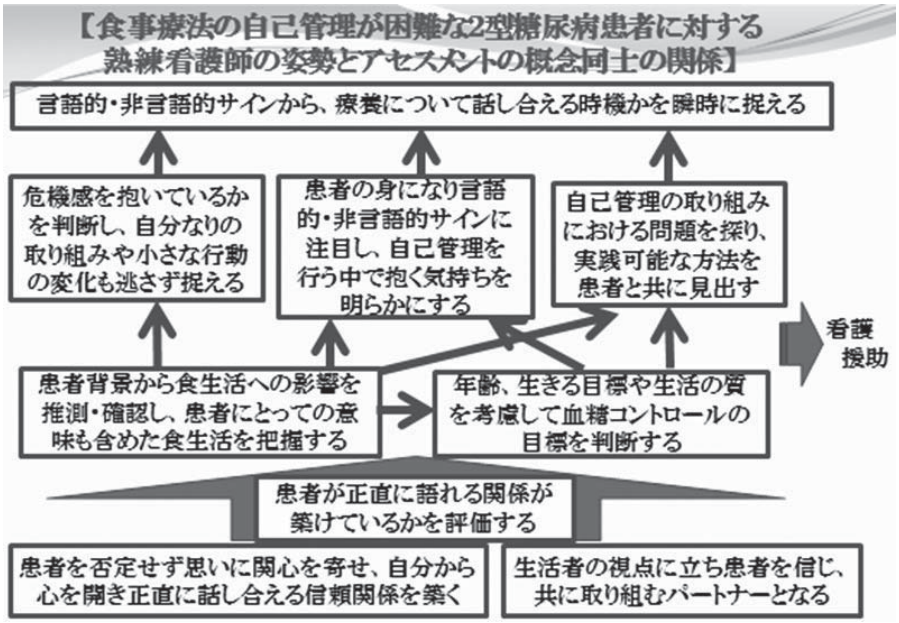


図１　食事療養の自己管理が困難な２型糖尿病患者に対する熟練看護師の姿勢とアセスメントの概念同士の関係

（熟練看護師５名の分析結果：第 17 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会 ,2012 年にて発表）

２．今後の課題、展望

・熟練看護師 13 名のデータを統合した分析結果の検討をすすめ、食事療法の自己管理が困難な２型糖尿病患者に対する熟練看護師の姿勢とアセスメントの構造化を行う。

・年齢を考慮した目標設定の判断や支援方法の違いなどについて、詳細に明らかにしていく。

３．2012 年度の業績

・山岸直子 ,「食事療法の自己管理が困難な２型糖尿病患者に対する熟練看護師の姿勢とアセスメント（第２報）」，第 17 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会 ,2012 年９月

Quality Improvement を担う 先導ナースの養成プログラムの開発・検証

小池　智子　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

A．目標

最適なケアと患者のアウトカムを促進するために、各チームやユニットにおいてケアの質保証システムを稼働し、ケアの改善を先導する看護リーダーの育成プログラムの開発ならびに検証を行う。

2012 年度は、以下の２つのプログラム開発をめざした。

1．Quality Improvement を効果的にすすめる PDCA（Plan・Do・Check・Action）マネジメント・サイクル実践プログラム

2．ケースを用いたマネジメント能力を育成する学習プログラム

B．計画および実施過程

1．Quality Improvement を効果的にすすめる PDCA（Plan・Do・Check・Action）マネジメント・サイクル実践プログラム

1）2011 年度までの準備状況

2006 年より複数の医療機関、団体等の看護管理者およびチームリーダーを担う看護師を対象に、医療現場におけるマネジメントの課題に取り組み改善をはかることを目的に、問題解決の理論と技法を用いた「問題解決技法研修（ベストプラクティス研修）」を実施してきた。1 年間を通して看護サービス提供の改善に取り組んだ実践事例は、こえまでに 100 事例を超えている。職場の看護提供のシステム改善が着実に進んでいる一方、効果的にすすめる上で様々な課題も見えてきた。

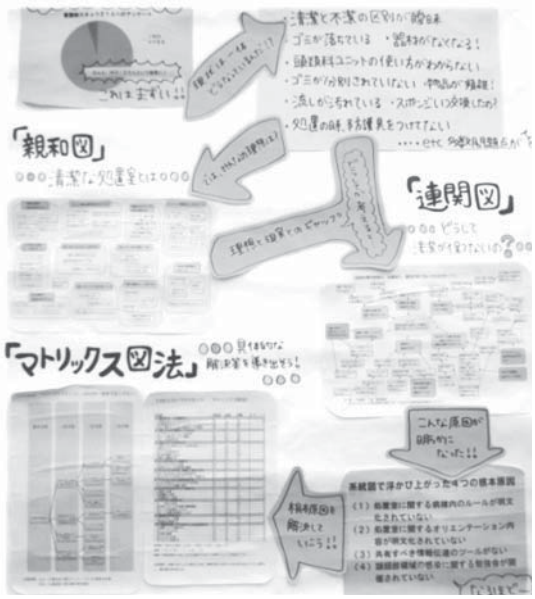
これらの事例の成功要因および達成困難の要因を抽出し、Quality Improvement に資する PDCA 実践プログラムを開発することが課題であった。

2）計画および実施過程

① Quality Improvement の主要な理論ならび方法（QC：Quality Control、TQM：Total Quality Management、BSC：Balanced Scorecared など）を収集し、Quality Improvement に取り組む上での共通する概念と方法、課題特異的な方法について整理した。

② 2011 年度までの通年で改善に取り組んだ実践事例のうち、成果が明らかな 20 事例について、研修講師として介入を行った取り組み開始時、中間点、成果発表時の資料を分析し、課題を整理した。ここれにより、取り組みには、戦略的問題解決サイクルとオペレーション的問題解決サイクルがあることがわかった。戦略的問題解決サイクルでは「あるべき姿」の構想の確かさが改善の要となっており、オペレーション的問題解決サイクルではいかに目標・基準が明確であることが重要であるかがわかった。

③これらを踏まえて、「あるべき姿」の構想と目標・基準の明確化に焦点を当てて「問題解決技法研修（ベストプラクティス研修）」の内容を再構成し、5 つの医療機関（内 3 施設は通年で実施）ならびに認定看護管理者教育課程（ファーストレベル、セカンドレベル）4 課程で実施した。



2．ケースを用いたマネジメント能力を育成する学習プログラム

1）2011 年度までの準備状況

ケースメソッドを用い、ケースをシミュレーション（模擬経験）することで、管理者が、自分たちが置かれている状況とそこに存在する課題を認識し、その解決のために何をしたらよりかを考える能力を強化するプログラムを検討してきた。

2008 年の厚生科学研究の成果を基盤に、2010 年～ 2011 年は、在宅看護領域の看護管理者・経営者を対象とし、経営改善、人的資源活用、技術ネットワーク形成、災害時広域ネットワーク形成などの 10 のケースを作成した。これらのケースを用いてケースメッソッドセミナーを開催し、10 回にわたりそのプロセスを誌上で発表した他、学術集会の交流集会などで模擬ケースメソッドを実施してきた。

2）2012 年度計画と実施状況

2012 年度は、これまでの実績を踏まえ、病院の看護管理者を対象とした 2 ケースを作成した。ケースは、「看護職員の人材育成と活用システムの構築」、「チーム医療における専門職種間の協働と、非専門職との業務分担」に焦点をあてもので、3 つの認定看護管理者教育課程（ファーストレベル、セカンドレベル）の講義、演習で活用した。

C．目標達成状況と次年度への課題

2012 年度は 2 つのプログアムについて、これまでの実践活動内容の整理と分析をおこない、この結果をもとにプログラムを再構成し改善してきた。次年度は、これらのプログラムの効果についての検証を行う予定である。

【本研究部門に関連した実績】

中西睦子、小池智子、松浦正子編：看護サービス管理（第 4 版）、医学書院、2013/3.

ヒヤリ・ハット事例に学ぶ

今さら聞けない！臨床看護のエビデンスの WEB 配信

森田　夏実　慶應義塾大学看護医療学部　准教授

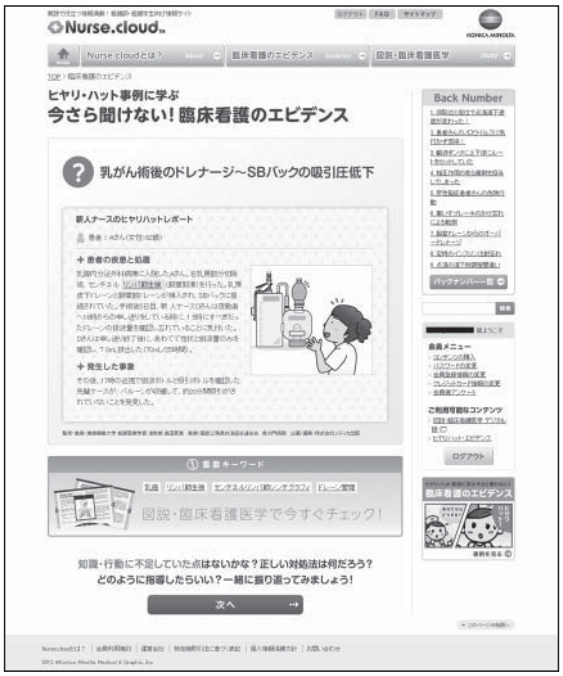
A. 目標

・看護師向け Web サイトを開設し、臨床看護師への普及をはかる。
・開設後の評価を行い、次年度に向けた課題を明らかにする。

B. 計画および実施過程

1．研究組織：森田夏実 (慶應義塾大学)、福家幸子、宗村美江子（虎の門病院）、内匠屋隆（コニカミノルタエムジー株式会社）、粟本安津子（(株) メディカ出版）

2．実施過程：



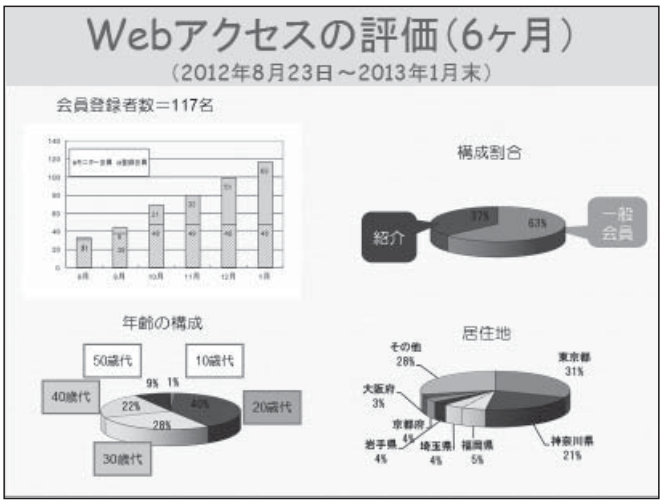
本 WEB サイトの開発経緯は、2011 年夏頃よりコニカミノルタエムジー株式会社でナース向けの情報サイト開発が企画され、1 年間関係者が会合を重ねた。2012 年 8 月にパソコンやモバイル端末からフリーでアクセス出来る，看護師 / 看護学生向け情報サイト Nurse.cloud の開設に至った。サイトは、現場で起こったヒヤリ・ハット事例から、臨床看護のエビデンスを学べるよう、①事例、（患者の疾患と処置・発生した事象）、②考えられる原因、③適切な対処法、④知っておきたい看護技術、⑤プリセプター・指導者へのワンポイントアドバイス、によって構成されている。さらに、図説◆臨床看護医学デジタル版（有料）をひもづけることで、医学的、看護学的知識を深められるようにした。実際に報告されたヒヤ・ハット報告を基に掲載時期や現場での頻度等を勘案して事例を作成し、2 週間毎に新しい事例を web に掲載している。

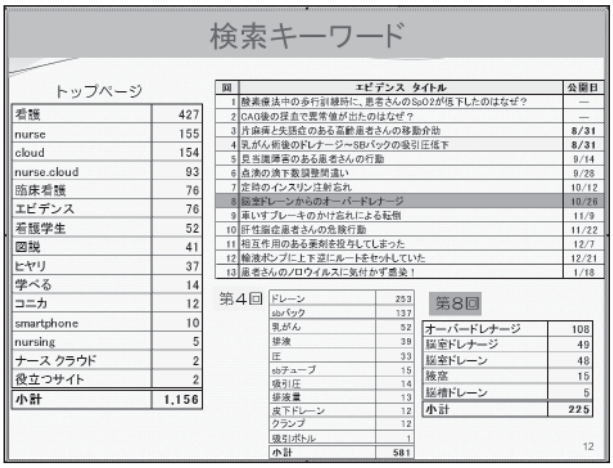
C. 目標達成状況

1．研究実践活動

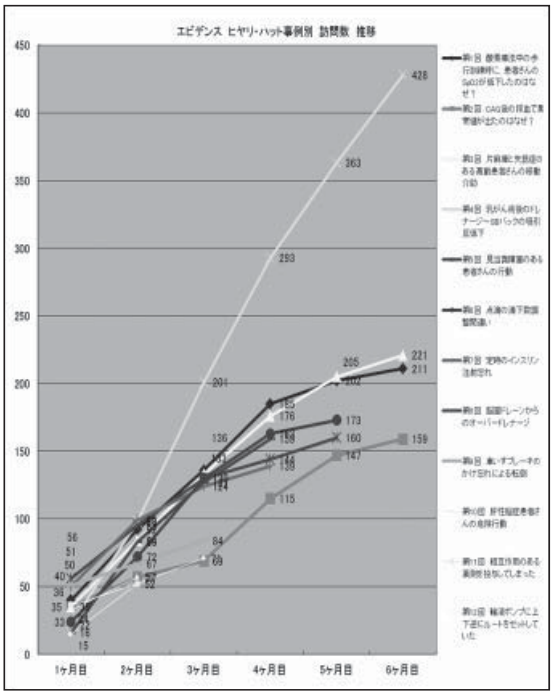
8 月 23 日に Web サイトを一般に公開しチラシを用いて主として研究者による周知を図った。会員登録（無料）すると、②～⑦の内容が閲覧できる。その後、4 ヶ月、6 ヶ月で Web サイトのアクセス分析を行なった。

6 ヶ月間のサイトへの全訪問は、5376 件、そのうち 30% のアクセスはモバイル端末経由であった。参照元は、共同研究のメディカ出版ホームページからが多く、2 位はグーグルであった。キーサード検索による訪問が多かったが、中でも「ドレーン」「SB バック」「ドレナージ」が多上位を占め、『乳がん術後のドレナージ～ SB バックの吸引圧低下（第 4 回）』、『脳室ドレーンからのオーバードレナージ（第 8 回）』へのアクセスが 1、2 位であった。





登録会員 (N=117) への web アンケート (回収率約 13%) では、7 割弱が臨床の看護師で、利用の上位は、現場で困っていたとき (39%)、後輩や新人の指導の為 (33%) で、本サイトの目的で活用されていた。役立った内容は、多い順に、『見当識障害のある患者さんの行動 (第 5 回)』、『酸素療法中の歩行訓練時に、患者さんの SpO2 が低下したのはなぜ？ (第 1 回)』、『点滴の滴下数調整間違い (第 6 回)』、アクセスの順位とは異なった。勤務中の利用が 27%、掲載希望内容は、災害看護、看護倫理、臨床実習指導に使える質問箱と根拠等が挙げられた。



2．今後の課題、展望

今後の課題は、1. 訪問数の増加対策、2. ユーザー増加、3. 会員増加、4. コンテンツの評価である。コンテンツがどのようにユーザーに使われているかなどを検討し、内容の充実を図っていきたい。

3．2012 年度の業績

森田夏実、福家幸子、内匠屋隆、宗村美江子、粟本安津子、看護師向け学習 Web サイトの評価―開設 4 ヵ月のアクセス分析―、第 3 回日本看護評価学会学術集会、2013.2.27、第 3 回日本看護評価学会学術集会講演抄録集、p.38, 2013.

高い臨床教育能力を育成するための研修プログラムの検討

朴　順禮　　慶應義塾大学看護医療学部　専任講師

A. 目標

慶應義塾大学病院看護部と協働で実施している「看護職キャリアシステム構築：ジェネラリスト・ナースの発達モデル事業」における、臨床指導ナース等の養成プログラムの開発に当たり、そのベースとなった基本構造についてロジックモデルにより検討する。

B. 計画および実施過程

近年、高度化・専門化された臨床現場において看護師の成長を促すには、臨床現場で高い教育的能力を持って新人看護師のみならず、病棟スタッフの人材育成の中心的な役割を担える、ロールモデルとなりうるよき教育的指導者を育成することが重要である。

そこで臨床教育能力の高い看護師を育成するために必要な研修プログラムの作成は急務であるが、今回はそのような人材育成プログラムを構築するに当たり、ロジックモデルを軸に研修プログラムのベースを作成した。

C. 目標達成状況

1．研究実践活動

研修プログラムのロジックモデルは以下の内容で構成された。

＜高い臨床教育能力を育成するためのロジックモデル＞

① **関連資源：**臨床現場における人材育成や自己の教育能力の成長に対して意欲を持っている看護師の存在、組織内にある教育的な役割を担う部署、看護大学教員、施設など

②**直接的な資源 (インプット)：**高い臨床教育能力を育成するための研修プログラム

③**プログラム構成 (活動)：**

講義・演習（基礎）　看護学教育、教育方法、看護研究、看護理論、臨床倫理、ケアリングなど

講義・演習（応用）　リフレクション演習、看護過程
コミュニケーション（コーチングスキル）など

実　習　学生実習指導、事例研究指導、集合教育におけるファシリテ―タ・インストラクター役割

④結果（アウトプット）：プログラムの実施

⑤直接的な成果（アウトカム）：

臨床看護教育に関する知識、教育能力、看護研究能力、コミュニケーション能力の向上、実習目標に合わせた学生指導および実習のコーディネートができる能力の習得、教育指導者としての役割モデルの実践など

⑥間接的な成果（アウトカム）：

新人をはじめとするスタッフの成長促進、職場全体で新人指導に取り組むことへのサポートおよび環境調整、臨床教育における指導体制の充実化など

⑦長期的な成果（アウトカム）：

病棟における文化が教育的かかわりに変化すること、安心できる職場環境への変化、役割モデルを目指すスタッフの増加、成長発達の昇進速度の早まり、看護の質の向上（患者満足度、日々の臨床能力、研究活動等）など

2．今後の課題、展望

研修プログラムを実施し、研修者自身が満足したとしても、研修で学んだ内容を実際の臨床現場で活かせること、すなわち「新しい行動様式」を身につけ、仕事上でその行動様式を継続することが重要である。そのためには、研修者個人の問題だけではなく、職場の上司や同僚といった周囲の状況がその新しい行動に対して好意的に協働していくことや、知識獲得から知識応用段階へと飛躍するためには職場での経験しかないため、行動変容としてサポートする仕組みをシステムとして組み入れること必要である。今回検討した臨床教育能力が高い看護師の人材育成プログラムの研修効果を高めるためには、研修を単独ではなくシステムとして捉え、研修内容および研修方法の見直や環境の整備といった切り口からのアプローチも加えていくことが大切である。

特に研修対象者は日ごろから病棟において指導者的役割を担っていることも多く、十分な研修時間の確保が難しく、慌ただしい中での研修参加となる可能性がある。時には日常業務から離れ、学んだ知識を熟考し意味づけする時間を確保することが、研修者のモチベーションを高め、役割遂行に繋がるものと考える。

3．2012 年度の業績

・田山聡子、西平万知子、朴順禮、八島朋子、矢崎久妙子、田村雅子、杉浦なおみ、滝沢瑞希 、茶園美香、宮脇美保子：「プリセプター教育支援プログラムとその効果―プリセプター自身の成長を促すプログラム―」. 日本看護協会学術集会 (看護管理).　2012 年 10 月.

1. 倫理コンサルテーションシステムの構築
2. ケアリング文化の醸成

宮脇　美保子　慶應義塾大学看護医療学部　教授

1. 倫理コンサルテーションシステムの構築

A. 目標

1) 臨床看護師が経験している倫理的苦悩を質的研究により明らかにする。
2) 倫理的苦悩を抱えている看護師を支援するシステムを構築する。

B. 計画および実施

1) 研究

①テーマ :「中堅看護師の倫理的苦悩と倫理的支援システムの構築」

2012 年度は、臨床経験 5 年以上の看護師を対象にインタビューを計画し、17 名に実施したデータを質的に分析した。中堅看護師の倫理的苦悩は、自律・与益・無危害・正義・誠実にといった倫理原則に沿ったケアができていないところから生じていた。その解決は個人的努力だけでは困難であると感じており、組織的、専門的支援の必要性が明らかになった。

②タイトル「臨床看護倫理 (仮題)」の執筆

これまでの研究成果を踏まえて、看護師が直面する倫理的問題、ジレンマに対しての向き合い方、解決の方法を提示することを意図した著書を執筆中である。

2) 実践活動

①医療機関、看護協会、大学等での看護実践における倫理と支援のあり方について講演を行った。

②医療倫理関連学会における活動を通じて、倫理コンサルテーションシステム構築に向けての情報収集、情報交換を行った。

③学術書　シリーズ生命倫理「看護倫理」を編集・執筆した。第 2 章「看護師の専門分化」は、小松浩子教授が執筆した。

C. 次年度への課題

1) 研究

①本研究の成果は、2013 年 11 月に米国で開催される Sigma Theta Tau International (STTI), Honor Society of Nursing, 42nd Biennial Convention で発表後、(selected) 論文として STTI に投稿予定である。

② 2013 年度内に「臨床看護倫理 (仮題)」を出版予定である。

2) 実践活動

所属学会の委員会活動を通して、「倫理コンサルテーション」に関わる国内諸団体との連携をはかるとともに、「倫理コンサルテーション」を担う人材育成及び組織のありかたについて検討する。

2. ケアリング文化の醸成

A. 目標

患者の立場にたった倫理的実践の実現に不可欠なケアリング文化を醸成する。

B. 計画および実施

1) 研究

質的研究の成果をもとに、ケアリング文化を醸成することの重要性について著した「看護師が病めない職場環境づくりー新人が育ち、自分も育つために」を出版した。

2) 実践活動

①医療機関、看護協会、大学等での看護におけるケアリング環境の重要性について講演を行った。

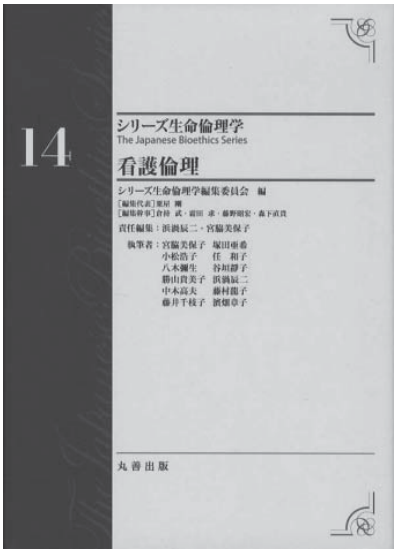
C. 次年度への課題

①医療機関、看護協会等で依頼されている講演および臨床看護師、患者との意見交換を予定している。

2012 年度の業績

1) 宮脇美保子 :「看護師が病めない職場環境づくりー新人が育ち、自分も育つために」
中央法規、2012

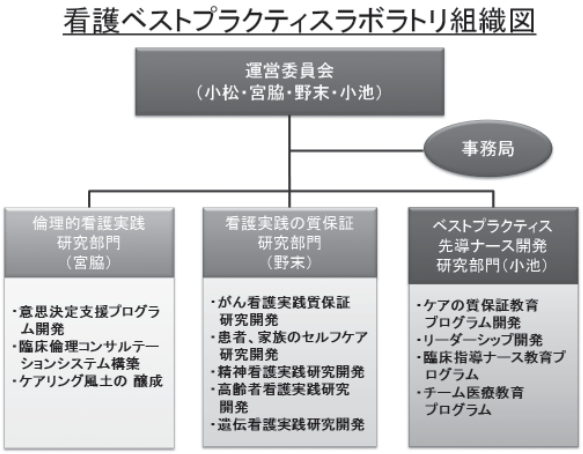
2) 浜渦辰二・宮脇美保子編 : シリーズ生命倫理 14 巻「看護倫理」、丸善、2012



フォーラムおよびシンポジウムの開催

質の高い看護実践（ベストプラクティス）の重要性や課題、成果を広く社会に啓発するために、本ラボでは、定期的にフォーラムを開催し、専門職にとどまらず、患者や市民の方と意見交換を行いました。

第１回　＜看護ベストプラクティス研究開発・ラボ＞　キックオフ・フォーラム



『看護ベストプラクティス研究開発・ラボ』のキックオフ・フォーラムを開催し、本ラボの概要紹介、研究紹介等を行いました。

日　時：２０１２年４月１１日(水)　１０時３０分～１２時００分
場　所：慶應義塾大学看護医療学部（藤沢キャンパス）２０１・２０２教室
プログラム：

学部長挨拶
看護ベストプラクティス研究開発・ラボの概要紹介
ラボラトリ・リーダー　小松　浩子

プロジェクト紹介
①プロジェクトＡ：看護実践の質保証研究開発 リーダー　野末　聖香
②プロジェクトＢ：ベストプラクティス先導ナースのキャリア開発　リーダー　小池智子
③プロジェクトＣ：倫理的看護実践のためのシステム構築　リーダー　宮脇　美保子

各研究紹介
ディスカッション　（司会：小松浩子）

第２回　シンポジウム　『患者にとっての最善のケア』

看護師、患者、看護倫理専門家の立場から「患者にとっての最善のケア」について発表を頂き、さらにディスカッションでは会場の参加者からもご意見を頂き、患者にとっての最善のケアについて深める機会になりました。
（参加者５７名）

日　時：２０１２年7月１７日 (火)　１８時００分～２０時３０分
場　所：慶應義塾大学病院　　２号館 11 階　大会議室
プログラム：
看護ベストプラクティス研究開発・ラボの概要紹介
ラボラトリ・リーダー　小松　浩子（慶應義塾大学看護医療学部　教授）
シンポジストの発表　（各発表 20 分）
①「患者にとっての最善のケアー看護師の立場からー」
神奈川県立がんセンター　がん看護専門看護師　　清水 奈緒美
②「患者にとっての最善のケアー患者の立場からー」
ＮＰＯ法人肺高血圧症研究会　代表理事　　重藤　啓子
③「患者にとっての最善のケアー看護倫理専門家の立場からー」
慶應義塾大学看護医療学部　教授　　宮脇　美保子
ディスカッション　（司会：小松　浩子、小池　智子）
交流会

第３回　フォーラム　『実践と研究をつないでベストプラクティスを創る』

第３回フォーラムでは「実践と研究をつないでベストプラクティスを創る」をテーマに、一つは、看護ベストプラクティスの活動グループ、もう一つは、病院と看護医療学部の共同研究グループによる＜ベストプラクティスを創る活動＞を紹介いただき、参加者の皆様と共に、実践と研究をつないでいくことの重要性や課題について検討しました。
（参加者 30 名）

日　時：２０１３年３月７日 (木)　１８時００分～２０時００分
場　所：慶應義塾大学看護医療学部　信濃町キャンパス孝養舎　202 教室
プログラム：
・挨拶　　太田　喜久子（慶應義塾大学看護医療学部　学部長）
・看護ベストプラクティス研究開発・ラボ　活動報告
　　ラボラトリ・リーダー　慶應義塾大学看護医療学部 教授　小松　浩子

１．看護ベストプラクティス研究開発・ラボによる病院・大学共同研究グループの活動
　広汎性子宮頸部摘出術を受ける患者への支援に関する研究
　　慶應義塾大学病院　師長　　片岡　美樹
　　慶應義塾大学看護医療学部 助教　矢ヶ崎　香

２．病院と大学の共同研究グループの活動
　小児のトータルケア研究会
　　慶應義塾大学病院　師長　　佐藤　裕美
　　慶應義塾大学看護医療学部 准教授　安田　恵美子
ディスカッション　（司会：小松　浩子）